



第138号
2023年 6月 1日発行
千葉大学教育学部
同窓会
〒263-8522
千葉市稲毛区弥生町1-33



千葉県教育庁企画管理部長 富田 浩明 (S 61・3卒)

教育課題について

平成二十一年から県行政、特に管理部門の経験から今日の教育課題について二点、私感も交えて述べさせていただきます。

まず、「教員不足」についてです。採用選考の志願者数は、ピーク時から二千名以上減少している中、千五百名を超える大量採用は続いています。この影響は、講師未配置という形で表れ、全学校種計で二百名を超えています。

千葉県教育委員会（以下、教育委員会）では、教員志願者を増やすため、民間企業と連携した採用プロモーション事業や大学との連携により、教員の魅力の発信を行っていきます。特に、千葉大学教育学部との連携を重要視しています。大学側は、教育学部に入學しても教員を目指す学生が多いという課題を抱えており、教育委員会としてこの目指さない層を

取り込めないかと考えています。一年生対象の特別講座を開講したり、その他にも教育学部との効果的な共同事業を検討したりしています。また、早い段階から教員としての職業意識を育むために、令和六年度までに成東高校など七校（既設四校を含む）に教員基礎コースを設置したり、採用選考の抜本的な見直しを検討したりしています。次は「働き方改革」についてです。教員不足解消のためにも、この改革は強力に押し進めなければなりません。今まで、教員の「子供たちのためなら時間をいくら費やしてもかまわない」という崇高な考えの下、担ってきた業務量を減らすわけですから、それを担うための対価が生じるのは当然のことになります。また、それを実行するには、行政も教員自身も今までの常識を覆す大きな意識改革が

必要となります。県で行った令和三年の条例・規則の改正では、「変形労働時間制」が注目されがちですが、「業務量の適切な管理に関する規定」に基づき、「時間外の上限を設け、それを達成するための指針を策定する」という規定こそが重要になります。教員の働き方改革をこのような方法で進めると、教育委員会の決意になります。具体的取組として、多様な支援員の充実による指導体制の整備があります。小学校では、教員の空き時間をどのように確保するか重要であり、スクールサポートスタッフを配置することによって負担軽減につながっています。また、高学年での教科担任制に加え、専科非常勤講師の配置を県独自で始めました。学力向上に資する他、短時間勤務を希望する方の受け皿にもつながることが期待されます。

中学校では、部活動指導員の配置と地域移行が鍵となってきました。これは、今までの部活動の考

紙面紹介

特別寄稿	6面
学校現場から	2面
学校現場へ	3面
会員のいきいき だより	4・5面
私の学園生活	7面
卒業を迎えて	8面
現役の学生から	8面
読者の声	9面
我が学舎の今昔	9面
海外の教育施設から	10面
支部だより	10面
新入生の声	11面
事務局より	11面
物故会員	11面
同窓生の美術館	12面
編集後記	12面

え方を変えるものであり、どの市町村も手探り状態です。財政基盤や地元のスポーツ協会等の状況もあり、課題は大きいのですが、生徒を休ませるという視点も持ちながら、教員の職務監督を担う市町村として責務を果たさなければいけないと思います。

教員不足解消には「働き方改革」が必要です。一方、これを進めるには人材確保も必要です。負のスパイラルに陥っている現状の中、既存の考えにとらわれない発想が必要です。一日五時間授業を打ち出した市があります。新採者に変形労働時間制を適用させている高校もあります。また、県立学校では寄附によるチャレンジ応援基金が始まり、特色を強く打ち出す財政基盤が整備されました。

教育委員会、学校には、今までの常識に捉われない創造力と実行力が試される時代になりました。



吉兆墨

特別寄稿



夢の実現まで三十五年

さまざまに出逢いに導かれ

芝浦工業大学柏中学高等学校校長

中根正義

(S.62・3卒)

人生は何が起きるか分からな
い。さまざまに出逢いに導かれ、
教員になる夢が還暦目前に実現す
ることになったからだ。三十五年
のブナや稼業を経ての転身である。

私は中学生のころから、教員に
なりたいたいと思っていた。当時は校
内暴力が吹き荒れていた時代。「ま
ずは、教育学を学びたい」と考え
た。中学時代の先生の紹介で定年
退官間近の城丸章夫先生に相談さ
せていただく機会に恵まれ、「小
学校教員養成課程教育学選修には
いい先生がそろっている。ぜひ、
千葉大学いらつしゃい」とアドバ
イスをいただいた。

私が教育学部で学んだころ、教
育学選修には生活指導論の坂本昇
一先生や教育哲学の宇佐美寛先
生、教育行政学の三輪定宣先生の
ほか、若手に学校経営学の天笠茂
先生や指導教官をお願いすること
になる教育社会学の明石要一先生
といった方々が名を連ねていた。
社会科教育選修には、後に筑波大

学に移り副学長などを歴任された
谷川彰英先生がいらつしゃり、研
究室にお邪魔することもあった。

教員を目指していた私が、なぜ
新聞記者になったのか。それは大
学四年の時の教育実習がきっかけ
だった。附属小での実習は一年生
を担当した。小学校に入学したば
かりの子供たちは、私に無邪気に
「せんせい、せんせい」と声をかけ
てきた。「社会経験もない自分が
先生と呼ばれていいのだろうか？
か？」そうした思いが頭もたげ
た。一般企業であれば、初年度に
戦力扱いされることはまずない。
それが教職の世界では、いきなり
担任を任せられることもある。

そこで、せめて会社訪問などを
してみようと、住宅建材メーカー
の会社説明会に出席したり、漠然
と興味を持っていた新聞社の就職
試験を受けたりした。受験したの
は、当時、教育報道に力を入れて
いた毎日新聞社である。

最初から住宅建材メーカーに行

く気はなく、内定が出る直前に断
りの連絡をした。一方、毎日新聞
社は筆記試験と論文試験をクリア
し、役員面接まで進んだ。そして
十月には内定が出て、教員採用試
験も採用通知が届いたのだ。

まさかの展開に、明石先生に相
談すると、「新聞社に決まってい
るじゃないですか。『石の上にも
三年』と言うでしょう。三年か五
年、社会経験を積んでみなさい。
教員になるのは、それからでもい
い」との助言をいただいた。

三年か五年のつもり記者生活
は、いつの間にか三十五年になっ
ていた。名刺一枚でいろいろな人
に会い、話を聞き、記事にまとめ
るのは性に合っていた。しかも、
約二十年は教育、中でも中等教育
や高等教育関係の取材が中心とな
り、大学関係者や文部科学省など
に知り合いができた。

そして一昨年初秋、まったく予想
しなかったことが起きる。それ
が、芝浦工業大学柏中学高等学校
校長就任の打診である。大学卒業
後も明石先生や谷川先生には取材
などでお世話になっていた。そこ
でお二人に御相談すると、口をそ
ろえて「やってみるべきだ」と。



明石要一先生と共に
1987年3月卒業式後に研究室の仲間を交え

「校長はやりたくても、誰でもで
きるものではない。君は教員になり
たくて教育学部で学んだのだから？
これまで教育に関する知見を積んで
きたはずだ。それを生かせ」という
助言に、腹をくくり新たな道を歩
んでみることにしたわけである。
現場では日々、さまざまなドラマ
が生まれる。その対応に悩まされる
こともある。だが、生徒たちの笑顔
を見ると、不思議に元気が出る。
そして今、しみじみ感じることに
がある。それは、たくさんの出逢
いに導かれ、今の自分があるとい
うことだ。人生百年時代と言われ
るなか、改めて夢を大切にしなが
ら、新たな人生を切り開いていき
たいと思っている。

同窓生の美術館

ゆっくりでも歩む日々



田所 雅子

(S 54・3卒
船橋市)

中学生の頃から絵を描くのが好きで、自宅近への里山にイーゼルを立てて風景を描いたり、妹をモデルに絵を描いたりしておりました。どうしたら絵描きになれるかと考えた末、美術の先生になろうと美術科に入学しました。卒業後は高校で美術を教えました。



夏の終わり (100号)

教員時代は忙しく、絵を描く時間はありませんでした。しかし、娘の出産後「やはり絵を描きたい」と、申し込んだカルチャースクールの指導者が同窓の大先輩でもある光風会の高橋規矩治郎先生でした。

夫の赴任でタイに八年滞在したこともありましたが、百号等の大きな絵を春は光風会、秋は日展、千葉県展と出品し続けてきました。最近是个展の小品を描いたり、遅ればせながらやっと絵描きのスタートラインに立てたという感じです。

千葉県に住んでいるのですが、夫の転勤先が栃木県の県北になったので、東北地方に足を伸ばすことが増えました。

特に福島県には有名な一本桜が沢山あります。私は女性像を描く絵描きですが、最近風景画を描くのが楽しみとなりました。

絵描きとしての歩みは遅々としていますが、残りの人生もずっと勉強であると思っておりますので、これからも頑張っております。

(光風会会員・日展会友・千葉県美術会理事)

編★集★後★記

三年に及んだ新型コロナウィルス禍の第八波が収束しつつあるが、この春からマスク着用が個人の判断となり、感染症法上の位置づけが二類から五類へ移行される。今回の会報がお手元に届く頃には、

マスクをはずし、友達といきいきと活動する子供たちの日常生活が戻っていることを願う。一方、一年が経過したロシアによるウクライナ侵略は、混迷の一途をたどっている。人命軽視、二度と繰り返してはならない核の脅威。改めて、平和・人権・国際理解教育等の重要性を痛感させられている。▼お届けいただいた玉稿の編集作業を通して、お一人お一人のポジティブな思考で、コロナ禍という逆境を乗り越える柔軟な発想力、行動力、問題解決力に敬服している。▼特別寄稿をお願いした中根さんは、「たくさんの出逢いに導かれ、今の自分がある」と述懐されている。このことは、私の学園生活のお二人の体験にも共通している。▼巻頭言では、教員不足と働き方改革の教育課題について述べられている。本同窓会報が、日本や世界の未来を担う子供たちを育てる教職の醍醐味を伝える一助となるよう、今後とも紙面の一層の充実を目指していきたい。(文責 小笠原真理子)